原 著

母親の子どもに対する 「愛着－養育バランス」尺度の開発 第2報

—尺度としての信頼性と妥当性—

Developing a Scale to Measure
Mothers' "Attachment-Caregiving Balance" toward Children
Report II:
—Reliability and Validity as Scale—

武田江里子^{1), *}, 小林康江²⁾, 加藤千晶³⁾

Eriko Takeda, Yasue Kobayashi, Chiaki Kato

キーワード：愛着－養育，養育システムの発達，母親

Key words : attachment-caregiving, development for caregiving system, mother

Abstract

Objective : This study evaluated the reliability and validity of the Attachment-Caregiving Balance Scale which measures mothers' "attachment" and "caregiving" toward their children.

Methods : A self-administered questionnaire was completed by 630 mothers who had children aged 1 month old, 6-11 months old, and/or 18 months old. The survey was conducted to assess the reliability and validity of the Scale using six factors (the factors of "adaptability," "sensitivity," and "intimacy" for each of the "attachment" and "caregiving" categories) and other external indices.

Results : Cronbach's α was 0.882, and exploratory factor analysis found a factor structure quite similar to what was expected. The results of confirmatory factor analysis were a goodness of fit index value of 0.842, an adjusted goodness of fit index value of 0.812, and a root mean square error of approximation value of 0.074. Significant differences were found by known groups analysis, and there was also a significant correlation, albeit below 0.7, with the external indices.

Conclusion : While criterion-related validity should be further examined, reliability and construct-related validity were supported, indicating that the scale can be used to measure the development of mothers as caregivers.

要 旨

目的：母親から子どもへの「愛着」「養育」を測定する「愛着－養育バランス」尺度の信頼性と妥当

受付日：2011年11月9日 受理日：2012年7月23日

1) 浜松医科大学助産学専攻科 Graduate Course of Midwifery, Hamamatsu University School of Medicine 2) 山梨大学大学院医学工学総合研究部 University of Yamanashi 3) 産育会堀病院 Hori Hospital

*E-mail : etakeda@hama-med.ac.jp

性を検討する。

方法：1 か月、6 か月～1 歳未満、1 歳 6 か月の子どもを持つ母親 630 名を対象に自記式質問紙調査を行った。「適応」「敏感性」「親密性」それぞれの愛着的因子・養育的因子の計 6 因子で構成された「愛着－養育バランス」尺度と、設定した外部指標を調査内容とし、尺度の信頼性・妥当性を検討した。

結果：クロンバックの α 係数 0.882、探索的因子分析ではおおむね想定した因子構造が得られた。確認的因子分析では GFI = .842, AGFI = .812, RMSEA = .074 であった。既知グループ法で有意差がみられ、外部指標とは有意な相関がみられたが、0.7 以上の相関ではなかった。

結論：基準関連妥当性に検討の余地は残ったが、信頼性、構成概念妥当性は支持され、母親の養育者としての発達を測定する尺度として使用可能といえる。

I. 緒 言

平成 22 年度「子ども・子育てビジョン」では、「少子化対策」から「子ども・子育て支援」へと、これまでの支援の考え方が再考されている。また、「親育ち」のための支援の重要性も指摘されてきている（大日向ら, 2005; 林, 2006）。しかし、親になると何が発達するのかという視点での研究（柏木ら, 1994; 目良, 2001; 林, 2006; 大橋ら, 2010）は多いが、発達の過程については明らかではない。親が養育者として発達するための支援の必要性は言われてきているが、発達過程が明らかでないため、個々の発達に応じた適切な支援を講じることができないのではないかと考えた。

数井ら（2005）は、親の移行期における親の愛着システムの養育システムへと統合（養育システムの再組織化）を発達としてとらえている。人間の発達過程は複雑であり、発達には量的な変化と質的な変化が含まれ、質的な変化は人間のそれぞれの部分の「分化と再組織化（総合＝統合）」の過程の繰り返しで、それを経てより進展することであり「構造化の過程」とも言われる（岸, 2000）。岸（2000）は、この構造化が発達の特性であると述べている。さらに広辞苑では発達を「個体が時間経過に伴ってその身体的・精神的機能を変えてゆく過程。成長と学習を要因として展開する」とあることから、養育システムが再組織化していくことを養育システムの発達、つまり養育者としての発達としてとらえた。

そこで、養育システムの再組織化はどのように測ることができるのかを検討することとした。第 1 報（武田ら, 2012）では、まず養育者である母親と子どもの関係の基盤となる「愛着－養育プログラム」（Bowlby, 1969, 1982）を構成する「愛着」「養育」について考察し、母親から子どもへの「愛着」「養育」の構成因子を抽出した。親の養育システムは、愛着システムの成熟した変容である（George & Solomon,

1999）と言い換えることができることから、「愛着」と「養育」の構成因子は共通していると考え、その共通因子として「適応」「敏感性」「親密性」をあげ、それぞれに愛着的因子・養育的因子を定義づけ 6 因子 30 項目を抽出し尺度を作成した。その 6 因子がどのように変化していくか（愛着と養育のバランス）をみていくことで、養育システムへの再組織化、つまり養育者としての発達過程が明らかにできると考えた。そして、作成した尺度の項目の安定性・内的一貫性・内容妥当性・表面妥当性・構成概念妥当性について検討した。

今回は、母親から子どもへの「愛着」「養育」の存在と程度を測定する尺度としての信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

II. 「愛着－養育バランス」尺度 （第 1 報の概要）

1. 「愛着」「養育」のとらえ方

「養育システム」の「愛着」「養育」のとらえ方は、愛着理論（Bowlby, 1969）の中での原義に基づいている。原義の「愛着」はネガティブな動機付け（不安、脅威等）により喚起され（Bowlby, 1969, 1982）、「養育」はネガティブな状態をポジティブな状態にしたいという動機付け（保護、安心をもたらす）により喚起される（Prior & Glaser, 2006）。一般的に「愛着」は愛情全般、「養育」は子育て全般を指し示し、母子相互において愛着という言葉を用いていることが多い。しかし、原義から言うと「愛着」は通常は強い者（養育者である母親）から弱い者（子ども）へは生じない（Prior & Glaser, 2006）。しかし、養育者として発達する過程、つまり養育者である母親自身の「愛着システム」と「養育システム」が混在する時期においては、母親の愛着（不安）の解消に子どもの反応も大きく影響することから、母親から子どもへの愛着も存在する

表1 「愛着－養育バランス」尺度の構成因子の定義（6因子構造）

	因子	定義
「適応」	愛着「子どもへの依存」	母親になったことに自信が持てず、子どもとの関係性が不安定な状態
	養育「役割受容」	母親という立場で、子どもとの関係性の安定と子どもの成長・発達を考えられること
「敏感性」	愛着「自分への関心」	自分への関心がより強くなっていること
	養育「子どもへの関心と理解」	子どもの状態を察知し、欲求を満たしてあげられること
「親密性」	愛着「自分に対する支え」	自分への支えや助け、癒しが必要な状態
	養育「子どもへの愛情と支え」	子どもを愛し支えたいと思うこと

と考えられる。本研究ではこの原義に基づいたとらえ方をしている。

2. 用語の定義

- ・**母親から子どもへの「愛着」**：母親としての自己意識が形成される途中においては、母親は自分自身への関心が強く、母親という存在に対して不安を感じる。支えを必要とし、母親としての不安を子ども（子どもの反応）を通して軽減しようとする。
- ・**母親から子どもへの「養育」**：子どもに関心を示し、子どもの持つ（潜在的なものも含め）不安や脅威に対して、保護し安心や慰めを与え子どもの不安や脅威を軽減させ、欲求を満たしてあげること。母親としての自分を受容すること。

3. 「愛着－養育バランス」尺度の構成因子

母親の「愛着」と「養育」の構成因子が共通していることは先に述べた。母親の愛着システムが養育システムへと移行する過程においては、母親の「愛着」「養育」は、そのバランスを変化させていると考えられ、それは、母親として「適応」しているかどうかでコントロールされ、母親のもつ「敏感性」が影響し（Ainsworth & Witting, 1969）、その過程を促進するには「親密性」が必要である（Belsky, 1999）。「愛着」「養育」を構成する因子として、この「適応」「敏感性」「親密性」の3つの因子をあげ、それぞれの中に愛着因子、養育因子を定義づけ、6因子構造とした（表1）。

4. 下位項目候補の抽出

先行研究で使用されているスケールおよび内容から項目を抽出し、重複の整理を行い、それらに自己で作成した項目を合わせて244項目を抽出した。244項目を母性・助産学の専門家5名とともに6因子の定義に則って内容妥当性について検討し、最終的に60

項目を抽出した。60項目の質問紙を3人の母親を対象に表面妥当性を確認し、一部表現を修正した。尺度は数量的な変化をみるため7件法による評定尺度とした。

5. 予備調査による下位項目の決定

1か月児を持つ母親167名、1歳6か月児を持つ母親177名、計344名を対象に60項目の自記式質問紙による調査を行った。60項目の項目分析、GP分析、IT相関、探索的因子分析、再テスト法、クロンバックの α 係数の結果を、想定していた6因子に照らし合わせ選出した。選出した30項目のクロンバックの α 係数および再テストの結果から信頼性を確認し、探索的因子分析および既知グループ法によって構成概念妥当性を確認した。その結果、クロンバックの α 係数0.882、探索的因子分析では6因子構造が確認され30項目の選出に至り、尺度の項目の信頼性・妥当性は検証できた。

Ⅲ. 本調査による尺度としての信頼性・妥当性の検討

1. 調査対象者

生後1か月、6か月～1歳未満、1歳6か月の子どもを持つ母親とし、1か月健診、乳児健診（6～7か月健診、9～10か月健診）、1歳6か月健診および6～8か月児の母親を対象とした子育て教室や離乳食教室に来所した母親（計1176名）を対象とした。

母親の養育システムの発達は、母子間の愛着－養育プログラムを促進していく（Bowlby, 1969, 1982）ことから、子どもの愛着の発達段階と養育システムの発達は関連していると考えた。生後1か月は、まだ子どもからの愛着がないとされる時期（子どもの愛着の発達の第1段階）であり、さらに、母親と子どもはまだ同一化している時期（Winnicott, 1958）であること

から、養育システムへの再組織化はなされていないと考えられた。1歳6か月は子どもからの愛着がみられ(子どもの愛着の発達第3段階)、さらに、母親は子どもと心理的分離ができていた時期であり、養育システムの再組織化がなされていると考えられた。再組織化がなされた時期は、母親の分離不安がなくなるとされる産後6か月から、母親としてのアイデンティティが形成されるという産後9か月頃(Rubin, 1984/1997)と考えられる。これらのことより、再組織化がなされていないと考えられる時期(産後1か月)、なされると考えられる時期(産後6か月～1年未満)、すでになされていると考えられる時期(産後1年6か月)の母親を対象とした。

2. 調査時期およびデータ収集方法

2010年9月～10月に実施し、調査票は郵送での返信を依頼した。

3. 調査内容

- 1) 子どもの月齢、性別、子どもの人数、就業状況
- 2) 「愛着－養育バランス」尺度(抽出された30項目)
- 3) 「愛着－養育バランス」尺度の外部指標として、「不安尺度(STAI 日本語版)」「自尊感情尺度」「共依存チェックリスト」「感受性尺度(他者意識尺度)」「対児感情尺度」を調査票の内容に加えた。

(1) 「不安尺度(STAI 日本語版)」は、清水・今榮(1981)によるスピルバーガーらのSTAIの日本語版であり、信頼性および併存妥当性が確認されている。不安は愛着－養育の先行要件であり、不安が強いと愛着的要素が強く、不安が弱いと養育的要素が強くなると想定できるため、愛着－養育の存在・程度の外部指標として用いた。

(2) 「自尊感情尺度」は、ローゼンバーグの作成した尺度を山本、松井、山城(1982)が邦訳した尺度であり、主成分分析による内的一貫性および構成概念妥当性が確認されている。依存心が強く、自尊感情が低いということは養育者としての適応を妨げることから「適応」の外部指標として用いた。

(3) 「共依存チェックリスト」は尺度ではないが、フォーワード(1999/玉置訳, 2001)がカウンセリングの際に長年にわたり使用しており、共依存の特徴が明確に問われていることから外部指標のひとつとした。愛着と依存は類似しており、母親の子どもへの愛着が強い時期は互いに依存している(共依存)状態と

言え、その状態は母親が養育者として発達してくるに従い相互依存関係に移行する(金子, 2004)。共依存が強いかどうかは母親として適応してきたかどうかというひとつの基準になるため外部指標として用いた。

(4) 「感受性尺度」は、辻(1993)の開発した尺度であり、内的他者意識(子どもの状態を察知し子どもを理解しようとする内容)、外的他者意識(子どもの外見を気にする内容)、空想的他者意識(子どもへの思いに関する内容)を測定する項目で構成されている。クロンバックの α 係数による信頼性も確認されている。下位項目の「人」「他者」を「子ども」に変え、対象を母親とすることを開発者の了解を得て使用した。感受性(敏感性)は養育者の特徴(Ainsworth & Witting, 1969)と言われていることから敏感性の外部指標として用いた。

(5) 「対児感情尺度」は、花沢(1996)の開発した尺度であり、接近項目、回避項目で構成されている。拮抗指数(回避得点/接近得点 $\times 100$)としてアンビバレントな感情も測定している。再テストによる信頼性および基準関連妥当性が確認されている。子どもに対する態度と対児感情とは密接な関係があることは証明されており、子どもに対する親密性・敏感性の外部指標として用いた。

4. 分析方法

1) 信頼性の検討: クロンバックの α 係数から内的整合性を評価した。安定性については、予備調査の再テスト信頼係数で評価した。

2) 妥当性の検討: 構成概念妥当性は、因子妥当性、収束妥当性、既知グループ法から評価した。因子妥当性では探索的因子分析を行い想定していた6因子構造となるかを確認し、さらに確認的因子分析によってモデル適合を評価した。収束妥当性では6因子と不安尺度との相関から「愛着」「養育」の存在と程度を確認した。既知グループ法では6因子別に3群の対象の分散分析および出産歴による相違がないかで評価した。基準関連妥当性については外部指標とした各尺度との相関から評価した。養育システムの発達は時期によって異なることを想定して3つの対象群を設定していることから、分析も対象群ごとに行った。

統計処理はSPSS Ver.16.0(有意水準5%未満)およびAmos Ver.19.0(有意水準1%未満)を用いて行った。

表2 6 因子 30 項目の確認的因子分析結果（標準化推定値）

N = 630

項 目	「適応」 愛着	「適応」 養育	「感性」 愛着	「感性」 養育	「親密性」 愛着	「親密性」 養育
	子どもへの 依存	役割受容	自分への 関心	子どもへの 関心と理解	自分に 対する支え	子どもへの 愛情と支え
第1因子 「適応」愛着						
6. 子どもに嫌われているように感じる	0.619					
13. 子どもに裏切られたように感じて悲しくなることがある	0.518					
23. 子どもを育てていけるか不安である	0.677					
26. 子どもに受け入れられるか不安である	0.757					
27. 子どもが泣くと母親としての自信が揺らぐ	0.686					
第2因子 「適応」養育						
11. 母親であることを誇りに思っている		0.638				
14. 子育ては大変ではあるが、それ以上にやりがいを感じる		0.724				
15. 子どもを持って、今まで以上に社会が広がった		0.533				
25. 子どもを持って、自分は成長したと感じる		0.619				
29. 母親であることが好きである		0.719				
第3因子 「感性」愛着						
3. 自分の都合で子ども（の要求）を受け入れたくないときがある			0.742			
7. 自分のその時々で抱っこすることがある			0.502			
9. 子どもが言うことをきかないと怒ってきかせようとすることがある			0.648			
10. 子どもより自分の都合を優先させることがある			0.661			
30. 育てにくいと感じることがある			0.482			
第4因子 「感性」養育						
4. 子どもが何を求めているのかはわかる				0.492		
16. 子どもの求めていることにはうまく応えてあげられる				0.684		
18. 子どもとはよく目が合う				0.497		
21. 自分と子どもはいい関係を保てていると思う				0.775		
22. 子どもは私に抱かれると、それまで泣き続けていても泣きやむと思う				0.570		
第5因子 「親密性」愛着						
1. つらく感じて誰かに支えてもらいたい					0.607	
5. 子どものために我慢するばかりである					0.681	
8. 気の休まることなくホッとしたい					0.705	
17. 子育てを頑張っていることを誰かに認めてもらいたい					0.383	
20. 周囲はもっと私に関心を示してほしい					0.449	
第6因子 「親密性」養育						
2. 常に子どもと一緒にいて可愛がってあげたい						0.542
12. 子どものためなら、どんなことをしても支えていきたい						0.655
19. 子どもがそばにいとホッとする						0.699
24. 子どもを持って今までにないくらい愛する気持ちが強くなった						0.744
28. 子どもが幸せでいられるように愛してあげたい						0.489
因子間相関	「適応」 愛着	「適応」 養育	「感性」 愛着	「感性」 養育	「親密性」 愛着	「親密性」 養育
「適応」愛着	—					
「適応」養育	−0.508	—				
「感性」愛着	0.399	−0.411	—			
「感性」養育	−0.695	0.700	−0.329	—		
「親密性」愛着	0.600	−0.326	0.545	−0.276	—	
「親密性」養育	−0.345	0.887	−0.498	0.598	−0.274	—

GFI = .842, AGFI = .812, RMSEA = .074

表3 外部指標と6因子の対象別の相関

		不安尺度		自尊感情 尺度	共依存 チェック リスト	感受性尺度（他者意識）			対児感情尺度		
		状態不安	特性不安			内的	外的	空想的	接近得点	回避得点	拮抗指数
「適応」 愛着	1 か月	0.522 **	0.576 **	-0.455 **	0.252 **	-0.030	0.233 **	0.034	-0.102	0.275 **	0.279 **
	6 か月～1 歳	0.623 **	0.595 **	-0.517 **	0.230 **	-0.208 **	0.269 **	0.105	-0.166	0.437 **	0.452 **
	1 歳 6 か月	0.506 **	0.567 **	-0.598 **	0.197	-0.135	0.219 **	-0.050	-0.238 **	0.295 **	0.368 **
「適応」 養育	1 か月	-0.446 **	-0.341 **	0.198	0.125	0.559 **	0.080	0.270 **	0.403 **	-0.226 **	-0.360 **
	6 か月～1 歳	-0.459 **	-0.351 **	0.302 **	0.069	0.313 **	-0.008	0.222 **	0.437 **	-0.161	-0.283 **
	1 歳 6 か月	-0.496 **	-0.486 **	0.440 **	0.077	0.354 **	-0.048	0.277 **	0.503 **	-0.292 **	-0.495 **
「敏感性」 愛着	1 か月	0.290 **	0.334 **	-0.148	-0.110	-0.292 **	0.035	-0.090	-0.243 **	0.310 **	0.394 **
	6 か月～1 歳	0.291 **	0.463 **	-0.282 **	0.023	-0.291 **	0.133	-0.018	-0.141	0.389 **	0.420 **
	1 歳 6 か月	0.292 **	0.491 **	-0.341 **	0.083	-0.284 **	0.231 **	-0.061	-0.206 **	0.403 **	0.451 **
「敏感性」 養育	1 か月	-0.384 **	-0.399 **	0.342 **	-0.103	0.350 **	0.108	0.141	0.139	-0.154	-0.213 **
	6 か月～1 歳	-0.436 **	-0.366 **	0.370 **	0.018	0.447 **	-0.010	0.087	0.340 **	-0.238 **	-0.314 **
	1 歳 6 か月	-0.491 **	-0.400 **	0.404 **	0.061	0.402 **	0.061	0.234 **	0.412 **	-0.209 **	-0.390 **
「親密性」 愛着	1 か月	0.317 **	0.408 **	-0.191	0.102	0.013	0.171	0.032	-0.062	0.220 **	0.242 **
	6 か月～1 歳	0.504 **	0.551 **	-0.285 **	0.183	-0.003	0.249 **	0.159	0.014	0.346 **	0.344 **
	1 歳 6 か月	0.440 **	0.516 **	-0.298 **	0.266 **	0.001	0.314 **	0.007	-0.177	0.299 **	0.334 **
「親密性」 養育	1 か月	-0.245 **	-0.171	0.050	0.185	0.554 **	0.107	0.332 **	0.395 **	-0.210 **	-0.344 **
	6 か月～1 歳	-0.395 **	-0.275 **	0.131	0.043	0.433 **	0.085	0.223 **	0.398 **	-0.343 **	-0.437 **
	1 歳 6 か月	-0.428 **	-0.296 **	0.203 **	0.202 **	0.451 **	0.118	0.422 **	0.502 **	-0.226 **	-0.428 **

※ Pearson 相関係数

表中の□で囲んだ相関係数は、6 因子それぞれの外部指標として設定した尺度との相関を示す。

対象数の内訳：1 か月 $n=198$ 、6 か月～1 歳 $n=199$ 、1 歳 6 か月 $n=233$ ** $p<.01$ * $p<.05$

5. 倫理的配慮

筆者の所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。研究目的、プライバシーの保護、研究協力は自由意志であること、辞退に際して不利益のないことを書面にて説明し、記入および投函にて同意とみなす旨を明示した。

6. 結果

回収された 651 名のうち有効回答が得られた 630 名（有効回収率 53.6%）を分析対象とした。

1) 対象の属性

1 か月児の母親は 198 名、初産 49.0%，経産 51.0%，6 か月～1 歳未満児の母親は 199 名、初産 69.3%，経産 30.7%，1 歳 6 か月児の母親は 233 名、初産 51.5%，経産 48.5%であった。

2) 信頼性

クロンバックの α 係数は、愛着的因子 15 項目で 0.832、養育的因子 15 項目で 0.868、30 項目全体では 0.882 であった。

3) 妥当性

(1) 探索的因子分析：因子数を 6 に固定して主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った。想定していた 1 因子 5 項目の構造と全く同じにはな

らなかったが、愛着的因子、養育的因子には分類され、おおむね想定していた項目が同じ因子の中に含まれていた。因子負荷量が 0.4 未満の項目が 3 項目あったが、その他は 0.4 以上の負荷量を示した。愛着的因子間および養育的因子間の因子間相関は、0.445～0.586 であった。KMO 標本妥当性の測度は 0.887、Bartlett の球面性検定は $p<.000$ で、因子分析を行う妥当性は確認できた。

(2) 確認的因子分析（表 2）：想定していた 6 因子構造で行った。パス係数の安定性をみるワルド検定では、すべての観測変数で有意差（ $p=.000$ ）がみとめられ安定を示した。標準化係数は、17「子育てを頑張っていることを誰かに認めてもらいたい」が 0.383 であったが、他の項目は 0.449～0.775 であった。モデル適合では $GFI=.842$ 、 $AGFI=.812$ 、 $RMSEA=.074$ であった。因子間相関は愛着的因子間、養育的因子間は正の相関、愛着的因子と養育的因子は負の相関がみられた。多母集団（1 か月児の母親、6 か月～1 歳未満児の母親、1 歳 6 か月児の母親）の確認的因子分析では、 $GFI=.784$ 、 $AGFI=.743$ 、 $RMSEA=.044$ であった。

(3) 外部指標との相関（表 3）：「不安尺度」との相関では、6 因子の中の愛着的因子とは正の相関、養育

表4 子どもの月年齢別の対象の6因子の平均値 (SD) および平均値の差

	全体		1 か月		6 か月～1 歳未満		1 歳 6 か月		分散分析結果
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F 値
適応：愛着	11.89	5.11	12.71	5.25	11.68	5.07	11.38	4.96	3.89 *
適応：養育	28.00	4.78	27.64	4.67	28.26	4.86	28.07	4.80	0.88
敏感性：愛着	17.01	5.76	15.58	5.57	16.45	6.03	18.71	5.25	18.18 ***
敏感性：養育	27.54	3.82	25.75	3.98	28.71	3.45	28.06	3.44	37.03 ***
親密性：愛着	18.75	5.20	18.79	4.88	19.46	5.20	18.11	5.40	3.68 *
親密性：養育	30.60	3.80	30.73	3.77	31.34	3.28	29.85	4.10	8.56 ***
	N=630		n=198		n=199		n=233		* $p<.05$ *** $p<.001$

的因子とは負の相関がみられた。不安の中でも「敏感性」愛着は特性不安と、「親密性」養育は状態不安との相関の方が高かった。「自尊感情」との相関では、愛着的因子と負の相関、養育的因子とは正の相関という傾向がみられ、特に「適応」愛着と高い相関がみられた。しかし「適応」養育の1か月児の母親では相関はみられなかった。「共依存」との相関では、1か月児と6か月～1歳未満児の母親で「適応」愛着と弱い正の相関がみられ、1歳6か月児の母親の「親密性」愛着および養育と弱い正の相関がみられた。「感受性尺度」との相関では、内的他者意識と養育的因子が正の相関、「敏感性」愛着と負の相関がみられた。外的他者意識と「適応」愛着、6か月～1歳未満児と1歳6か月児の母親の「親密性」愛着と正の相関、空想的他者意識と「適応」「親密性」養育が正の相関がみられた。「対児感情」との相関では、接近得点と養育的因子が正の相関、回避得点および拮抗指数と愛着的因子が正の相関がみられた。しかし、1か月児の母親の「敏感性」養育と接近得点とは相関がみられなかった。養育的因子は拮抗指数と負の相関がみられた。

(4) 既知グループ法：子どもの月年齢別の対象の平均値の比較 (一元配置分散分析) では「適応」愛着 (F 値 3.89*), 「敏感性」愛着 (F 値 18.18***), 「敏感性」養育 (F 値 37.03***), 「親密性」愛着 (F 値 3.68*), 「親密性」養育 (F 値 8.56***) と有意差がみられ、「適応」養育 (F 値 0.88) だけ有意差がみられなかった (* $p<.05$, *** $p<.001$) (表4)。

さらに出産歴による相違では、1か月児の母親、6か月～1歳未満児の母親、1歳6か月児の母親それぞれで出産歴による相違をみた。6因子 (各5項目) の合計の平均値の比較 (独立したサンプルの t 検定) では、1か月児の母親では「適応」愛着 ($t=3.581$, $p=.000$), 「敏感性」愛着 ($t=-5.704$, $p=.000$), 「敏

感性」養育 ($t=-4.768$, $p=.000$) で有意差がみられた。「適応」愛着は初産婦の方が高く、「敏感性」愛着、「敏感性」養育は経産婦の方が高い値を示した。6か月～1歳未満児の母親では、「適応」養育 ($t=-2.867$, $p=.005$), 「敏感性」愛着 ($t=-3.146$, $p=.002$) と有意差がみられた。いずれも経産婦の方が高い値を示した。1歳6か月児の母親では、有意差がみられたのは「敏感性」愛着 ($t=-3.194$, $p=.002$) のみであり、経産婦の方が高い値を示した (表5)。

Ⅳ. 考 察

1. 尺度の信頼性

項目抽出までの調査での再テスト信頼係数 (安定性) の値およびクロンバックの α 係数 (内的整合性) の値から信頼性は支持されたと言える。

2. 尺度の妥当性

内容妥当性および表面妥当性は、項目抽出までの調査にて確認している。

1) 構成概念妥当性

探索的因子分析ではおおむね想定していた因子構造が得られ、確認的因子分析では GFI, AGFI は .90 以上は得られなかったが、RMSEA は .08 以下で妥当な値が得られた (大石・都竹, 2009)。さらに、多母集団 (時期別) の確認的因子分析の結果では、RMSEA.044 と当てはまりのよい値が得られた。本尺度は変化していく過程を測定しようとしているため、時期別のモデル適合で当てはまりのよい値が得られたことは評価できる。適合度の指標に決定的なものではなく、複数の指標から総合的に判断する (大石・都竹, 2009) と言われていることから、本研究における適合度は妥当と考える。標準化推定値も 17 を除いては

表5 出産歴別の平均値の比較

		全体		1 か月		6～12 か月未満		1 歳 6 か月	
		平均値 (SD)	t 値	平均値 (SD)	t 値	平均値 (SD)	t 値	平均値 (SD)	t 値
適応：愛着	初産	12.5 (5.23)	3.125 **	14.0 (5.35)	3.581 ***	12.1 (5.07)	1.875	11.5 (5.07)	0.506
	経産	11.2 (4.86)		11.4 (4.84)		10.7 (4.97)		11.2 (4.85)	
適応：養育	初産	27.6 (5.04)	-2.254 *	27.2 (5.06)	-1.226	27.6 (4.96)	-2.867 **	28.0 (5.14)	-0.361
	経産	28.5 (4.38)		28.0 (4.25)		29.7 (4.32)		28.2 (4.44)	
敏感性：愛着	初産	15.7 (5.49)	-6.874 **	13.4 (4.86)	-5.704 ***	15.5 (5.49)	-3.146 **	17.7 (5.28)	-3.194 **
	経産	18.7 (5.64)		17.6 (5.44)		18.6 (6.68)		19.8 (5.01)	
敏感性：養育	初産	27.3 (4.00)	-2.057 *	24.4 (4.05)	-4.768 ***	28.5 (3.47)	-1.588	28.2 (3.37)	0.602
	経産	27.9 (3.56)		27.0 (3.49)		29.3 (3.35)		27.9 (3.51)	
親密性：愛着	初産	18.7 (5.25)	-0.386	18.4 (5.21)	-1.180	19.7 (5.26)	1.011	17.7 (5.12)	-1.066
	経産	18.8 (5.14)		19.2 (4.53)		18.9 (5.06)		18.5 (5.68)	
親密性：養育	初産	30.9 (3.66)	2.176 *	31.2 (3.64)	1.552	31.2 (3.26)	-0.771	30.3 (4.05)	1.684
	経産	30.2 (3.94)		30.3 (3.86)		31.6 (3.33)		29.4 (4.13)	
		N = 630 (初産 355 経産 275)		n = 198 (初産 97 経産 101)		n = 199 (初産 138 経産 61)		n = 233 (初産 120 経産 113)	

(*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$)

0.449～0.779 であり因子の妥当性が示された。

また、愛着的因子と不安尺度との正の相関から、母親から子どもへの愛着の先行要件である母親の不安の存在が確認できた。母親から子どもへの養育が発揮できるということは母親の不安の少ない状態と考えられ、養育的因子と不安尺度との負の相関から示された。ただし養育については、先行要件である子どもの不安の存在を測定していないため、養育を与える養育者である母親の準備状況の一部を支持した結果と考えるのが妥当である。不安（特性、状態）の程度は、どの時期においても、また初産・経産でも有意差はみられなかったが、不安の内容は調査していないため、その不安の解消を子どもに求めるか、夫や家族に求めるかを含めた調査で、母親から子どもへの愛着の存在をさらに証明していくことが必要である。今回の調査では、不安が強い状態というのは母親の「愛着」が促進され、不安が少ない状況は「養育」を促進するという収束妥当性が支持された。

既知グループ法による子どもの月年齢別の対象の比較では、6 因子中「適応」養育以外の 5 因子で有意差がみとめられ、これは愛着や養育は母親となつてからの時期によって変化するということの証拠となり、構成概念妥当性が支持された結果と考える。親の移行期における愛着システムから養育システムへのシフトを数井ら（2005）は、養育者の発達ととらえている。「愛着」はどれくらい不安を感じているかで活性化される（Bowlby, 1969, 1982）ことから、母親となつた

時期が浅いほど母親として大丈夫かという不安があり、つまり「愛着」的因子が高くなるということになる。しかし、本調査では、すべての愛着的因子がそのようにはなっていない。一方、養育的因子は、1 か月児の母親が最も低い、もしくは他と変わらないという結果であり、母親としての経験を積むことで高くなる傾向を示した。これは、思春期にはすでに幼い子どもに保護を与える養育者としての自分の表象を構築し始める（数井, 2002）ということから、養育的因子の素因はすでに持っているという結果であると言える。愛着的因子は、自分を保護してほしいという欲求であることから、子どもの愛着の発達など、より多くの要因が影響してくるため、養育的因子よりその変化は複雑である。

さらに、6 因子は出産歴による相違もみられた。しかし、1 か月、6 か月～1 歳未満、1 歳6 か月と子育ての経験を積むことで、敏感性「愛着」以外は初産、経産の差がなくなっていく。縦断調査ではないため個々の変化をみることができないので変化についてはここで結論を述べることはできないが、出産経験により発達の進み方は異なりそうである。しかし、経産婦だから発達が早いということではない。「愛着－養育システム」は 1 対 1 の関係であり、それは経産婦であっても、今回の子どもとの関係は初めてのことであり、その子との間の「愛着－養育システム」を発達させていく必要がある。経産婦が 2 人目の出産時に悩むということはよくあることである。そのような中で 2

人の子どもの母親として、第2子との関係を構築していく。2人目を虐待する母親もいるように、経産婦から大丈夫とか、すでに1人育てているから養育システムが発達しているとは言い切れない。愛着理論でいう「養育」というのは、育児技術云々ではなく、その子との関係性である。経産婦でもその子との関係は初めてであり、子育ての方法に慣れていることは初産婦よりは有利かもしれないが、関係性を新たに構築するという点においては同じと考えられる。出産歴による相違については、今後縦断調査や影響要因を含めた調査でさらに検討していく必要がある。

以上、因子妥当性、収束妥当性、既知グループ法の結果より構成概念妥当性は支持を得られたと考える。

2) 基準関連妥当性

「適応」については、自尊感情との相関より妥当性が支持された。自尊感情は他の因子とも相関がみられたが、相関係数の値から併存妥当性も支持されたと考える。共依存とも弱い相関がみられたが、妥当性を担保する値とは言えない。「敏感性」については、内的他者意識・対児感情と相関がみられ妥当性が支持されたが、内的他者意識・対児感情は他の因子とも相関があり併存妥当性は得られなかった。「親密性」についても同様で、対児感情との相関から妥当性は支持されたが、併存妥当性は得られなかった。愛着的因子および養育的因子の相関の方向（正か負か）は統一性があり、各外部指標の愛着的因子および養育的因子との相関は示された。併存妥当性が十分に得られなかったのは、愛着的因子どうしおよび養育的因子どうしの相関から、それぞれの因子間には影響を受け合っているためと解釈できる。基準関連妥当性が支持されるには、有意で高い相関（ $r \geq .70$ ）を必要とすると言われているが、本研究では有意差はみとめられたものの.70以上の高い相関は得られなかった。しかし、妥当性は証拠によって支持される程度が違う（Polit & Beck, 2008）とも解釈されていることから、高い相関は得られなかったが関連があることは証明され、今後はその証拠を検証していくことが重要と考える。

V. 研究の限界と今後の課題

今回の調査は横断的調査であり、個々での変化についての妥当性は検討できない。今後は縦断調査も行いながら、個々の変化の過程や発達に影響する要因についても検討し、研究を積み重ねていく中で尺度の妥当

性を追求し証明していく必要がある。また、実際の母親の養育行動との結びつきや子どもへの影響についても調査し、実際場面での有用性についても検討していきたい。さらに、6因子ごとのカットオフ値の検討、健診等でのアセスメントツールの一つとしての有用性の検討、および6因子のバランスから支援策を構築していくことが課題である。

VI. 結 語

「愛着－養育バランス」尺度の信頼性は支持された。妥当性については基準関連妥当性に検討の余地が残る。今後さらに検討していく必要があるが、尺度全体の構成概念妥当性は支持された。母親から子どもへの「愛着」「養育」の存在と程度から、本尺度は母親の養育者としての発達を測定する尺度として使用可能であると言える。

謝辞：本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝いたします。本論文は山梨大学大学院医学工学総合教育部に提出した博士論文の一部を加筆修正したものである。

文 献

- Ainsworth M., Witting B. (1969): Attachment and exploratory behavior of one-year-olds in a strange situation, In B. M. Foss (ed.), *Determines of Infant Behavior*, 4, 113–136, Methuen, London.
- Belsky J. (1999): Interactional and contextual determinants of attachment security, Cassidy J., Shaver P. (Ed.), *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications*, 249–264, The Guilford Press, New York.
- Bowlby J. (1969, 1982)／黒田実郎, 大羽泰, 岡田洋子, 他 (1991): 母子関係の理論 I (第1版改訂), 岩崎学術出版社, 東京.
- Forward S. (1999)／玉置悟 (2001): 毒になる親, 講談社+α文庫, 東京.
- George C., Solomon J. (1999): The caregiving system: A behavioral system approach to parenting, Cassidy J., Shaver P. (Ed.), *Handbook of Attachment: Theory, Research and Clinical Applications* (2nd Ed.), 833–856, The Guilford Press, New York.
- 花沢成一 (1996): 母性心理学, 医学書院, 東京.
- 林昭志 (2006): 親を生涯発達の観点から捉える試み—乳幼児期の親の発達について—, 上田女子短期大学紀要, (29), 1–9.
- 金子道子 (2004): 相互依存の適応行動様式に関するパースペクティブ, 日本適応看護理論研究会学術論文集, 3(1), 167–187.

- 柏木恵子, 若松素子 (1994): 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み, 発達心理学研究, **5**, 72-83.
- 数井みゆき (2002): 養育システムの発達—愛着システムとの関連についての一考察—, 茨城大学教育学部紀要, (51), 45-63.
- 数井みゆき, 遠藤利彦 (2005): アタッチメント—生涯にわたる絆—, ミネルヴァ書房, 東京.
- 岸信行 (2000): 発達の諸相と教育の課題, めいけい出版, 東京.
- 目良秋子 (2001): 父親と母親の子育てによる人格発達, 発達研究, 16.
- 大橋幸美, 浅野みどり (2010): 育児期の親性尺度の開発, 信頼性と妥当性の検討, 日本看護研究学会雑誌, **33**(5), 45-53.
- 大日向雅美, 莊巖舜哉 (2005): 子育ての環境学, 大修館書店, 東京.
- 大石展緒, 都竹浩生 (2009): Amos で学ぶ調査系データ解析, 東京図書, 東京.
- Polit D. F., Beck C. T. (2004) / 近藤潤子 (2010): 看護研究 原理と方法 (第2版), 医学書院, 東京.
- Prior V., Glaser D. (2006) / 加藤和生 (2008): 愛着と愛着障害 (初版), 北大路書房, 京都.
- Rubin R. (1984) / 新道幸恵, 後藤桂子訳 (1997): 母性課題, 母性論—母性の主観的体験 (第1版), 62-82, 医学書院, 東京.
- 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子 (1982): 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, **30**(1), 64-68.
- 清水秀美, 今栄国晴 (1981): STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版の作成, 教育心理学研究, **29**(4), 62-67.
- 武田江里子, 小林康江, 加藤千晶 (2012): 母親の子どもに対する「愛着－養育バランス」尺度の開発 第1報—母親から子どもへの「愛着」「養育」の構成因子の抽出—, 日本看護学会誌, **32**(1), 30-39.
- 辻平治郎 (1993): 自己意識と他者意識, 北大路書房, 京都.
- Winnicott D. (1958) / 成田義弘, 根本真弓訳 (2007): Through Paediatrics to Psychoanalysis. London: Tavistock Publications, Basic Books, New York, 赤ん坊と母親, 岩崎学術出版社, 東京.